

提言7

災害に強い学校に

学校は地域のコミュニティ拠点です。児童・生徒の学習する場であるとともに、市民が自主的に生活していくために必要な機能と場を併せ持つものとなっていなければなりません。

それには、高いブロック塀に囲まれた閉鎖的な学校からの転換が必要です。防災の目的にも沿った樹木の植栽など学校の公園化も考えられます。また、防犯上の問題など検討しなくてはならないこともあります。学校を囲うフェンスや、ブロック塀を撤去して、生け垣を導入し、バリアフリーな学校にしていく必要があります。

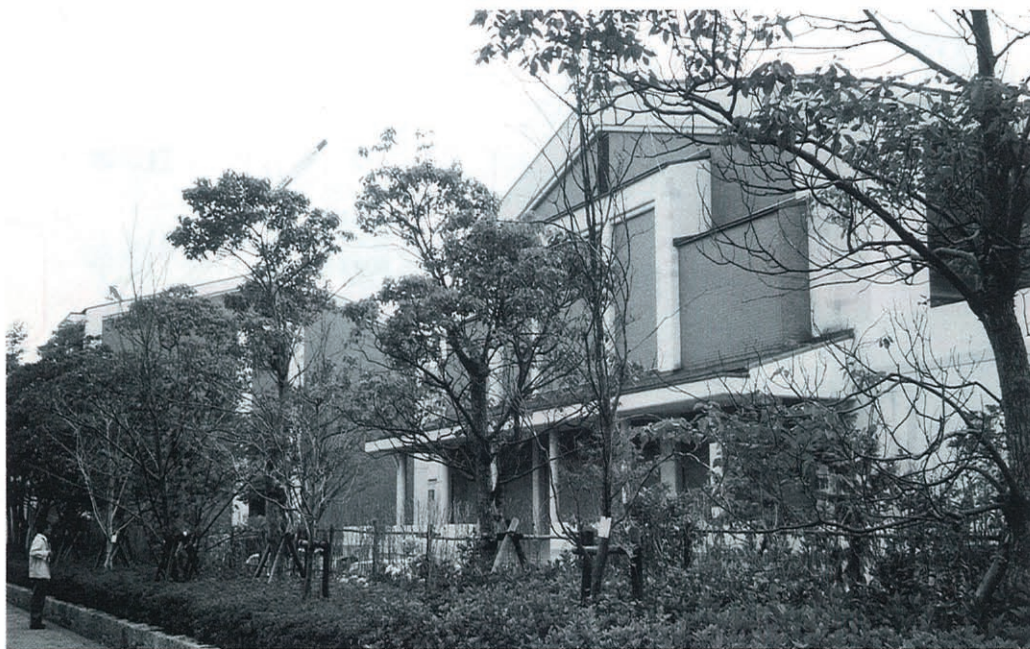
阪神・淡路大震災にみられるように、学校は長期にわたる市民の避難場所として活用せざるを得ません。多くの自治体では学校が一時避難場所として位置づけられ、防災備蓄倉庫など施

設・設備の整備がすすめられていますが、それだけでは十分ではありません。

災害に強い学校を作るとともに、学校は生活に必要な機能を持つことです。そのためには、学校施設の耐震強化、水や燃料の確保、屋上のヘリポート化、市民のプライバシーの確保、市民の自主運営・管理などクリアすべき課題があります。

また、いかに避難場所から速やかに教育の場として機能を回復するか、自然災害だけではなく、高圧鉄塔やパソコンなどから出る電磁波、プールの塩素被害なども急がれる課題です。

市民参加の学校運営を検討する中で、地震その他の災害から命と暮らしを守る学校の役割が求められています。



生け垣で囲まれた神戸市立向洋中学校(88年4月開校)。樹木などが植栽され、緑がまぶしい。